

〈自然主義〉の主体性

——『早稲田文学』・永井荷風への「推讃の辞」をめぐる論争考——

坂 崎 恭 平

はじめに

明治四一年七月、約五年間にわたる米・仏外遊より帰国した荷風は、『あめりか物語』（博文館、明治四一・八）を皮切りに、『ふらんす物語』（同、明治四二・三、出版直後に発禁）、帰国後の作品を収めた短篇集『歓楽』（易風社、同・九、同じく出版直後に発禁）、『歓楽』所収の作品を一部入れ替えた『荷風集』（同、同・一〇）と、立て続けに単行本を上梓した上に、さらに四二年一二月からは、『東京朝日新聞』紙上で初の長篇『冷笑』の連載を開始（翌年二月末まで、全七八回）するなど、目覚ましい活躍ぶりを見せる。外遊期から本国に送るかたちで発表していたものを含めるとは言え、この執筆ペースは尋常ではなく、質・量ともに非常に豊作であった四二年の活動を讀え、『早稲田文学』誌は、荷風に「推讃の辞」^①を贈

る。

如上の小説壇に於いて、昨一年の間、新に吾人の視野に聳えたるものは、短篇小説集『歓楽』の著者永井荷風氏を推すべし。其の作、糜爛せる歓楽の心と、生に對する一切の拘束を呪ふの心とを以て、譬へば木犀の香の咽ぶが如き風味を成す。此の点に於いて昨年小説壇の異色たると共に、其の脚の切なる現実より遊離せざる限り他の諸家と基音を共にする新芸術の人たるは論無かるべし。吾人は過去一年の文勲に對する推讃の標目を此の作家に置かんとす。^②

何とも抽象的な物言いであり、何を以て荷風が「推讃」されたのか、判然としない。「荷風氏が自然主義者によつて推讃の辞を贈られたこと」を「どういふ手続を以て承認すれば可いのであるか」、この「矛盾は、嘗に一見して矛盾に見える許りでなく、見れば見る

程何処迄も矛盾してゐるのである」と啄木が語るように、この出来事は、まさに一種の矛盾のようなものとして受け取られ、文壇において物議を醸すこととなる。毀誉褒貶入り乱れるかたちで、論争が起こるのである。反自然派の側である阿部次郎と、自然主義側である相馬御風との間で主に繰り上げられたこの論争の争点を乱暴に要約すれば、自然主義側が荷風を顕彰することの是非^③、といったものであった。早くに論争を取り上げた吉田精一は、「所詮、この問題は自然派対反自然派の党派的争ひに終始した観があり、荷風はそのいけにへとつた」と総括する^④。

多くの文学論争がそうであるように、根本的には確かに単なる「党派的争ひ」なのかもしれない。不毛な議論であるという印象も拭えない。それゆえか、荷風を論じるなかでしばしば触れられる際も、本論争は軽く流されてきたように思われる^⑤。

如上の状況に鑑みて、論争を今一度精査しようというのが、本稿の企図するところである。デジタル化が進み、雑多な資料へのアクセスが簡便になった今日、当時の自然主義をめぐる数多の議論を再考するに際して、本稿をその最初の一步としたい。

幸いなことに、論争に関わる資料の大半は、すでに集成・復刻されている^⑥。以下では、それらの資料を改めて吟味するとともに、調査の過程で見つかったいくつかの資料を増補することで、議論の再

整理を試みる。

一、論争前夜・荷風評価の一面

最初に、論争直前の荷風評価を一瞥しておく。荷風と、自然主義側の先鋒的存在であった御風との間に親交があったというのは、よく知られるところである。『中央公論』第二四卷第一号（明治四二・一一）には、「現代人物評論」というシリーズの第三回として、「永井荷風論」が掲載されている。そこにおいて、後の論争の当事者である御風は云う。「僕は永井君の作を、お先走りして賞めた一人である」。御風は何より、『あめりか物語』・『ふらんす物語』を高く評価する。後者に至っては、「原稿を借り」て「二度も三度も繰り返して読んだ」という。問題はその後であった。「監獄書の裏」（『早稲田文学』第四〇号、明治四二・三）・「祝盃」（『中央公論』第二四卷第五号、明治四二・五）・「歓楽」（『新小説』第一四卷第七号、明治四二・七）の辺りから、「僕が荷風君から受ける印象が、妙に纏らなくなつたやうな気がし出した。今迄受けて居た印象に、何だか溶け合はぬものが入つて来たやうな気がし出した」。続いて「帰朝者の日記」（『中央公論』第二四卷第一〇号、明治四二・一〇）が発表され、「いよく妙になつた。胸でばかり受けて居た印象の国へ、頭が手を出すやうになつた。そして妙に苦情を申し立

てたいやうな手つきをし出した」――。

外遊生活を描いた『あめりか物語』・『ふらんす物語』から、帰国後の生活を描いた諸作品へ。御風はそこにある種の変化を看取する。後者の作品群は『歓楽』・『荷風集』に収められ、『歓楽』は「推讃の辞」を贈られた書であった。雑誌としては顕彰するが、友人としては違和感を表明する、といったねじれが、ここにはうかがえる。

ところで、御風のこの文章のなかで面白いのは、「胸」と「頭」というレトリックである。「胸」というのはどうも、「情緒」といった意であるようだ。「頭」というのは、的確に対応する用語が見いだせないが、「日本を論ずる」といった、一種の文明論的な理路を指していると考えられる。つまり、情緒にあふれたものから文明論的なものへの作風の転換が、御風にとって「近作に慊らぬ」ゆえんなのである。荷風の「胸の世界」にひそむ「サムシング」（御風が好んだ用語である）を希求するこの姿勢は、後の論争にも引き継がれていくこととなる。^⑦

この人物評のなかで、荷風と自然主義との相違点について触れる者もいた。守田有秋は云う。「自分は氏の態度が、自然派諸家の態度と愈々相違して居る事を此一篇『歓楽』に依て想察する」。「蓋し氏の思想は決して、日本帝国に於ける自然主義者として、自然主義を抱懷すると云ふやうな、其様の曖昧なものではない」。根拠は

不明であるが、どうも「態度」の「相違」が境界線となっているようだ（作家の「態度」という抽象的な概念は、論争において軸の一つとなる）。

「氏は、無解決に満足して居る人とは思はれぬ。若し無解決に安住して停る事が出来るならば、何も其の祖国を咀ひ、其の社会を罵る必要はあるまい。成程氏は赤旗を推し立て、現代と争ふ人ではあるまいが、有る現代社会のものを否定する態度は、解決を有し、理想を有する思想家にして、現代社会に換ゆるに何等かの改良されたる他の者を以てせんとして居る事が解る。要するに氏は明かに自然主義者ではない。然し『歓楽』に収めた諸篇の中には自然派の作品も混つて居る例へば「祝盃」「牡丹の客」等の如き、其れである」――。

いわゆる〈無理想・無解決〉ではなく、「氏は明かに自然主義者ではない」が、「諸篇の中には自然派の作品も混つて居る」――短編集『歓楽』にひそむこうしたグラデーションが、あるいは『早稲田文学』をして、「推讃の辞」を贈るに至らしめたのかもしれない。が、冒頭に引用したように、讃辞はあまりに詩的かつ抽象的であり、明確な意図を読み取ることは困難である。言い換えれば、意図が汲み取れないからこそ、疑義が呈されたとも言えるだろう。境界線上でゆらぐ荷風の作品と、意図を汲み取りかねる讃辞。炎上の条件は、

十分に整っていた。

二、論争のはじまり——表面上の対立

論争の口火を切ったのは阿部であった。^⑧「自然主義と十分の聯絡を附することも出来ずに之と反対した傾向の（時には意識的に之を嘲つてゐるとも見える）永井氏の小説を推讃するのは、之は諸氏の主張の弛緩と主義の動搖とを示するものであつて宏量でも坦懷でも何でもなと思ふ」。「自然派の現状に対する反語として永井氏の小説を受取るのならば、それで可い。正面から両者を一括することは、従来の無暗に包括的な遣り方を極端にして自然主義を現代主義又は最広義の浪漫主義と同義語にしなければ、約言すれば自然主義の特殊の意義を破壊して了はなければ出来さうにも思はれない」。

「自然派の現状」とここで行われているのは、反自然派の圏域においてしばしば云われる、*「衰退」*を意味するようだ。落ち目であるのを糊塗するように、「正面から両者を一括する」ことが問題視される。「自然主義の主張者は是等の反対要素（「現代の神秘的理想的若くは情感的（狭義に云ふ）傾向」を明確に意識して敢て之と対抗す可きである、徒らに一切を併呑して何でも新しいものは自然主義で御座いと云ふ様な顔をするのは狡猾に非ずむば不聰明である」）。つまり、一種の「雑な囲い込み」が非難されるのである。「規

制的勢力として雑然たる現代的諸傾向の中に一種の統一（少くとも態度の点に於て）を作らむとする」ことが、阿部が考える理想の「自然主義」像であつた。

阿部が要請したのは、*「自然主義」*側の「真正」な「態度」や「立場」の表明といったものだった。「何も早稲田文学で永井氏を推讃するのを悪いと云ふのではない。唯人格全体として諸氏の真正の立場を反省若くは明示して貰ひたいのである」。「私は一日も早く之「思想上人格上の根底を有する理想的の党派」が成立つて思想上に花々しく錦を削る様にならむことを希望する。天弦氏が自然派の花形で孤島氏が非自然派のチャンピオンである様な滑稽な（私は敢て滑稽と云ふ）色別は最早無用有害である。私は現文壇に於ける著るしき対立の一として花袋泡鳴諸氏の自然主義と敏先生荷風氏等の享楽主義との矛盾を問題として提出する」。

「色別」を超えて、「思想上人格上の根底を有する理想的の党派」へ——これが阿部の描く文壇のヴィジョンであり、後の論にも繋がる、彼の主張の骨子であつた。

阿部の論から一週間後に、御風は論戦を仕掛ける。「第一に此問題の中心点は、永井荷風氏の作風は如何なる根柢に立つて居るものと云ふ事である」。「根柢」という、阿部と同様の語を用いていることから、議題が共有されてるのかと思いきや、彼は変化球を投ず

る。「全然自然主義と傾向を異にした作家として祭り上げられて居る荷風氏はその出発点に於てはゾライズムであつた事を忘れて貰ひたくはない」「出発点に於てゾライズムであつた永井荷風氏は、四年の洋行の後になつて、全然別人になつたか。少なくとも全然頭の別人となつたか」、「洋行土産として第一に「あめりか物語」を頂戴した吾々は、打たれても叩かれても矢張「ノー」と叫ぶ外はない」——こうした週行的な論法は、「包括的な遣り方」だという阿部の批判に対する反論なのであるが、これ自体がまさに「包括的な遣り方」であり、脆弱な論理である感は否めない。

続いて、御風は阿部の云う「矛盾」に反駁する。「吾々は思ふ。

荷風氏は決して／＼単純なる享楽主義の人ではない。荷風氏は単純なる享楽主義の人たるべく、頭腦のあまりに冷やかなる人である」。「次郎君の如き人が、荷風氏を以て単純なる享楽主義の人とするのは、まだ好くわが国の自然主義の本質が呑み込めて居ないのであらう」。「荷風氏にしろ泡鳴氏にしろ、到底単純な歓楽の人、単純な耽溺の人となり得る人々ではない。彼等には覚めたる意識がある。我をも突き放して、現実の底の底までも、観極めずんば止まぬと云ふ冷明な意識がある」。

阿部が云う「矛盾」を解消するための鍵となる共通項的な概念は、「覚めたる意識」・「冷明な意識」といったものであつた。「矛盾」を

突きつける者と、それに反駁する者。しかし両者は、実は見かけほどには対立していないのかもしれない。というのも、御風が提示したこれらの共通項的な概念は、阿部が云う「思想上人格上の根底」という概念の、一つの具体的なあらわれとして捉えることも出来るからである。そう仮定すれば、両者が見据える、来たるべき文壇のヴィジョンは、実は類似しているのかもしれない。

「次郎君等の議論は兎角形式的になり過ぎる。表面的になり過ぎる」、「吾々若い者は」「徒らに勢力争のやうなケチな真似をして居る時代ではない」。これはある意味正しい主張である。両者の対立はまさに「形式的」・「表面的」なものである。荷風を「享楽主義」の側にカテゴライズしようとする阿部に反論する「『勢力争』をする（＝荷風をいわば奪い合う）ことが重要なのではない。そうではなく、「享楽主義」や「歓楽」の彼岸にある「覚めたる意識」・「冷明な意識」を見据えることこそが真に重要なのであり、それは阿部の云う「思想上人格上の根底」という理念と、通じ合う可能性がある。初戦では噛み合うとも噛み合わないとも言えないこの論争は、ではいかにして延焼していったのか。

三、叩かれる讃辞

阿部と御風の再度の応酬を見る前に、資料の補足も兼ねて、周辺

の意見を見ておこう。管見の限りいち早く反応したのは、太田水穂である。^⑩曰く、讃辞が「漠然」としており、「荷風氏の鑑賞的談理、趣味的批判の側面を見るも、之れは無論自然主義に於ける主智的傾向とも異り懷疑或は告白の形とも相違す」る。両者の「相違」に力点が置かれており、阿部側に立っていると見えるだろう。「吾人は永井氏に推讃の辞を呈するを不当とせず、ただその推讃すべき点の飽く迄も公正ならむことを欲するもの、強いて格段なる思想参列の中に牽繫せしめむとするの要を見ずと思惟す」というのも、阿部の主張に近い。

反自然派の牙城とも言える『新小説』の時評は、「次郎君の説の如く自然主義とは大いに反対した傾向を持つてゐるし折々は痛罵をさへ彼等に浴せかける荷風君に「推讃の辞」を捧げるなどは本気の沙汰とは思へない」と難ずる。^⑪「荷風君よ、彼等が少し頭角を出しかける新文士に飴を賞めさせる慣用手段に油断為たまふ勿れだ」。

味方側と言つてもよい徳田秋江すらも、讃辞の一件に難を示す。^⑫

「兎角早稲田文学派には、巧者に目前を更へ、新しいものを取り入れて行かう／＼とする態度が著しく目に立つのを嘲つたのかも知れぬ。それならば早稲田文学派が何と言はれても仕方がないと言ふ処がないでもない」。「早稲田文学派は、最も伶俐であつて、同時に最も馬鹿であると思ふ」。「早稲田文学派が新しいものを取り入れるに

何の仔細もない。が、私の希望を此処で言はしむれば、同じ新しいものを取り入れるにしても、今少しく眼敏くしたら何うであらうかと思ふ」。彼らは「あまりに脇眼を振り過ぎる」。

同様の批判は他にも見られる。「早稲田文学」で、自然派でもない永井荷風に推讃の辞を捧げたのは、朝日の一評家がいつた如く明かに自然派の降伏である。「本当にエライと思つた為めか、味方に引入れたい為めか、言ふまでもなく味方に引込みたい為めである、それが自然派の策略だ」。「自然派」は「如何にも陰險で策略を好み、コセ／＼して居て人の顔色を読むことが上手だ、自分等よりもエライ者には御世辞を使つて仲間に入込む事は彼等の慣手段だ、早稲田文学は此慣手段を実行したものである」。^⑬

以上を見るに、讃辞の贈呈に対して、文壇は概ね批判的であつたと言えるだろう。その中でも安倍能成は、一際注目すべき発言をしている。「自分は次郎氏の説に賛する者であるが、尚ほこの上の論文を経て、自然主義といふもの、本体の明らかにせられることを望む」、「例へば相馬氏のいふ如く自然主義を以て単に態度の上のことなりとするが如きは、頗る軽断に過ぎると思ふ」、「自然主義の内容から規定せられてこそ、自然主義に通じた態度といふものも問題になるのであらうと思ふ」。

「態度」の手前で「内容」を「規定」する『自然主義といふもの

の、本体の明らかに」することを、安部は提案する。この提案は、他の論に比べれば、より高次元のものであると言えるだろう。この論説を目にしたのかどうか定かではないが、阿部の第二の論は、まさにこうした次元において展開されることとなる。

「どうも次郎氏等には、常に偏見が付き纏うて、自然派と云へば、何がなしに批難して見たい、どこかに欠点があればよいと求め詫びる態度があるやうに思はれるこの「自ら知らざる自然主義者」などは尤もよくこれを証する。苦々しいことだ」という本間久雄の一言が、阿部に反論を決行させる引き金となり、御風との間に、二度目の応酬が繰り広げられることとなる。

四、阿部の反論——〈自然主義〉の自己規定

阿部の反論がなされたのは、御風の論から一月ほどを経てのことであつた。¹⁶

「僕の批難するは動揺する思想と趣味とを持ち乍ら其動揺を意識する能はざる者を若くは意識せざる真似する「自ら知らざる自然主義者」である。内に決定せる態度なくして外に決定せる態度あるが如くに装ふ「自然主義誇張者」である」。

「動揺」というのは、抽象的な物言いでもって荷風を讃辞するといった、自然主義側の迷走ぶりの謂いであろう。その動揺を意識で

きない、もしくは意識しない真似をする者が、「自ら知らざる自然主義者」である（意識できないことと意識しない振りをするということの間には、何か決定的な違いがある気がするが、ここでは措いておく）。ともかく、自意識の欠如が言挙げされるのである。それは「内に決定せる態度なくして外に決定せる態度あるが如くに装ふ」こと、つまり主体性の欠如（の偽装）であるとも言えるだろう。

阿部は諭える。彼らは「行詰まりの鉄の扉を力任せに叩く勇気なくして迂路々々逃道を求むる「新を猟る人」である」と。「決定」という語の意味は、おそらく「自己規定」といった意であろう。自己規定を「内」で行うか「外」にゆだねる（ふりをする）か、その差異が重要なのである。「内に決定せる態度」＝内省的な自己規定を欠いたまま、「外に決定せる態度あるが如くに装ふ」＝外部にその規定をゆだねるふりをするとは、「誇張」であり、「逃道を求むる」以外のなものでもない、と。

ところで、阿部のこの論のなかで難しいのは、「而して僕は我国自然主義の主張と永井氏近時の作風とは矛盾すると思ひ、自然主義者と自称し乍ら永井氏の近作を推讃する者は「自ら知らざる者」だと思つた」という一文である。この一文は、如上の自己規定のことを踏まえたものとして見てよいのだろうか。単に「荷風の作風は自然主義的ではない」といったコンスタティブな主張なのか、はたまた

た、自然主義の連中の「態度」とは異なり、荷風の作風には自己規定が含まれる」といった、パフォーマティブな意味にまで拡大解釈してよいものなのか、正直なところ判断がつきかねる。仮に後者だとすると、荷風のテクストに対する阿部の評価が正当なものなのかどうか、ここでは判断を下しえない。が、ともかく、「意識」と「決定」において、阿部は両者の間に「矛盾」を見て取ったことは確かである。「思想界の調子を明かにする為め」・「自然主義其物の主張を純粹にする為め」に提示された、〈自然主義〉側の自己規定をめぐるこの「批難」は、阿部の最初の論にもその萌芽が認められる、重要な論点であると言えるだろう。

併せて見ておきたいのは、阿部が「永井氏の近作を享楽主義だと云つた理由」についてである。「要するに現代的享楽主義の根底に呻くものは自然主義の場合と等しく「悩める現代の心」である。唯享楽主義は現実より浮かばんとし自然主義は其底に沈まむとする、彼は美の為に真を求め此は真の為に真を求める。従つて「現実」、「真」、「有の儘」等に対する解釈及態度に於いて著しい対照がある、一言にして云へば両者は出発点に於て同一でも行かむとする方向に大なる矛盾がある。自然主義の道を主張する者が享楽主義の道を行むとする者を推讀するは依然として「動揺せる自然主義者」である、「自ら知らざる自然主義者」である」。

自然主義と享楽主義の、同一性（Ⅱ「出発点」）と差異（Ⅱ「行かむとする方向」）。彼の考えではそもそも、「覚めたる観照的意識」を有する事も享楽主義の人たるを妨げない。「かう云つて来ると相馬君の論拠は凡てあの儘では通用しなくなつて来る。自然主義に格段な「悲痛」「観照的意識」を持つて来なければ永井氏が自然主義だと云ふ議論は成立なくなる。併し相馬君は其処迄立入らずに「悲痛」「痛切」「生命の響」覚めたる「観照的意識」「冷明」「冷たいくく」「深いくく」と云つた様な自然主義的な言葉の響で満足してゐるやうである。「言葉の響丈で問題が決つた様に考へてゐる点に於ては最も形式的である」。

「言葉の響」（Ⅱイメージ？）に「満足」せず、「区別すべき物を区別し比較すべき物を比較」せよ——この主張自体がしかし、幾分「形式的」なものであろう。「区別」も「比較」も言葉によつてなされる以上、その「響」から完全に自由でいられるわけではない。「享楽主義」でも「観照的意識」でも何でもそうなのだが、結局は論者ごとの定義をめぐる争論なのであり、「形式的」に解決できる類のものではなく、阿部もまた泥沼にはまり込んでいる。^⑪

贅肉が多く、やや冗長な感はあるが、ともかく〈自然主義〉の自己規定という、論争の可能性の中心を示し得た阿部の論に、御風はいかに応答したのか。

五、御風の応答／未遂と、その後

御風は云う。^⑮「第一に付け加へて置かねばならぬ事は、吾々が荷風君に推讃の辞を贈つたのは、荷風君を単に自然主義者と限つてしまつた上の事でないと云ふ事である」。「付け加へて置」くと断られているとおり、後出しという感否めない（論争というものの自体が、こうした後出しがまかり通る空間であるとも言えるが）。「全然自然主義と傾向を異にした作家として祭り上げられて居る荷風氏はその出発点に於てはゾライズムであつた事を忘れて貰ひたくはない」、「荷風氏は決して／＼単純なる享楽主義の人ではない」という先の言と、完全に矛盾するというわけではないが、少々齟齬をきたしているという感じは否めない。

「吾々が永井荷風君を推讃した理由は、何もかも自分等の拵へた型の中に嵌めてしまふと云ふやうな偏狭な横着な考へからでは更になくして、吾々の生活と調子を同じくするサムシングを永井荷風君の作物中に見出して、それを推讃したのである。見出したものは矢張り自己である。主義ではない。他を自己中に包容しやうとするのではなく、他の中に自己のブライテイを見出さうとするのが吾々の態度である」。

「主義」に基づいた「推讃」ではなく、「吾々の生活と調子と同じ

くするサムシング」＝「自己」を荷風の「作物中に見出して、それを推讃した」。他者を自己に投影するのではなく、自己を他者に投影する——先に見た阿部の論に照らせば、これは反論になっていない。阿部が「批難」したのは、「内に決定せる態度なくして外に決定せる態度あるが如くに装ふ」ことであり、御風がここで強弁している、まさに、自己規定を他者にゆだねるふりをする／＼ような姿勢だった。論争の決着点は見えつつある。「次郎君は思想上の懷疑家、吾々は思想上の懷疑を通り越して現実の上の懷疑者となつて居る者である」、「吾々には次郎君のやうに何物をも一定の型の中に観ると云ふ事は、到底出来ない」、「次郎君が如何に永井荷風君の作物を享楽主義のものとしやうとしても、吾々には永井荷風君の作物に吾々に触れる要素のある限り、推讃に値する」、「吾々は初めから永井荷風君を自然主義の人として推讃したのではない。永井荷風君の作物の複雑な味の中から、吾々と合する契点のある事を認めて、それを推讃したに過ぎぬ」——贅言を尽くしているが、「内に決定せる態度なくして外に決定せる態度あるが如くに装ふ」という阿部の「批難」に、十全に応答できているとは言えない。「吾々は此上次郎君に向つて云ふべき事がない。諸君は諸君で勝手に定めて見るが好い」と、論破を諦めたかのような捨て台詞によつて、論は閉じられる。

御風の反論（にならぬ反論）に、阿部が再度応じた様子はない。

これ以上の議論は無用との判断であらうか。「内」(自己)か「外」(他者)か。《自然主義》の「態度」を「決定」する場合、主体性の在処という、者詰めていけば——少なくとも党派的な争いとしては片付けられない程度には——有意義であらうこの論点は、結局者詰められないまま、論争は打ち切られる。

最後に、後日談として、再度周囲の意見も見ておこう。新進気鋭の美術評論家であった黒田鵬心^⑨は、「御風君は次郎君の単純を嗤つてゐるが、僕から見ると御風君はまだ次郎君の云ふ真意がわかつて居ないらしい」と、《自然主義》の主体性^⑩という、この論争のクリティカル・ポイントに思い至つたかのような口振りであるが、「御風君の答ふる所は、荷風君は自然主義者なりと云ふのではなくてはならぬ筈である。其の時に御風君等の主義は、主義として真面目のものと云はれるのだ」と、ここまで散々見てきた、^⑪「困い込み」という最もプリミティブ(かつ党派的)な次元に議論を落着させている。

本問の再びの言及は、やはり御風を擁護する体のものであった。

「吾々から云ふと、荷風氏は「現実から飛び離れ」やうとする態度が特に著しくない限りは、何も同氏を以て自然主義ではなく享楽主義の人とする必要がないのである。早稲田文学者が彼れを推讃したのに何等の矛盾も不思議もない」。ここでもやはり、《自然主義》の

主体性という、重要な論点が拾われることはない。

年が明けて四四年、昨年を総括するなかで、論争及び荷風の文業は、目玉の一つとなるトピックであった。ある時評は云う。「二たび『早稲田文学』から推讃の辞を贈られて問題を惹起し、二たび長篇『冷笑』を公にして問題の種となつた」(『冷笑』の連載は四二年一二月から翌年二月末日まで)。「問題の中心は要するに彼の芸術が享楽主義の芸術であるか否かにある」と規定された上で、論争と『冷笑』は、ある面において有機的な関係を有するものとして語られる。荷風の「芸術上の主張が自然主義にあるか享楽主義にあるかは、文壇の将来に少なからぬ関係を有する事は無論である。殊に現在の文芸界に於ける主潮を成して居る自然主義派に動揺を与へて、新たに文壇的勢力を得やうとする一派の野心家等にとりては、実に非常な重大問題である」。吉田精一が云うような、党派的な争いの道具としての荷風。「『早稲田文学』の推讃の辞に対して文壇の一隅に一度反抗の声の挙げらるゝや、騒然として雷同附和の声が起つた」時、「茶人式な冷笑皮肉を事として、面白可笑しくその日くを送つて居る一種の消極的な快楽主義者を主人公とした『冷笑』の一篇が出た」(単行本は同年五月に刊行)。それは奇しくも、論争が終息する時期と、ほぼ軌を一にしていた。

本作を見て、それを「讀へるもの、駁する者、」それ見た事か」

と云ふ者、相寄り相集り、作品の佳否を投り除けて騒ぎ立てた。そこで愈々『冷笑』は快樂主義の小説で、永井荷風は快樂派の小説家と云ふ事に相場が定りかけ、中にはムキになってその主義を危険呼ば、りをした新聞などもあつた²²。

「所が意外にも、『三田文学』の『紅茶の後』で作者自身が、『冷笑』は決して享樂主義を主張する為めの小説などではない、寧ろ享樂主義的な一個の人物が時代生活の圧迫の爲めにその欲する所を満たし得ずして、やむを得ず一種の茶人式な冷笑家になり下り行く悲しき事実を描かうとしたものだと言明した」。

荷風は実際にはこう言っている。「享樂主義をのみ歌つたものではない。寧ろ享樂主義の主人公が、風土の空氣に余儀なくせられて、川柳式のあきらめと生悟りに入らうとする苦悶と悲哀とを語らうとしたものである²³」。

周囲の野次馬的な見方を、作者自らの解説によつて訂正すること、「折角定りかけた永井荷風の創作の態度が、又ぞろ曖昧なものになつて了つた。さぞ又騒ぎが起るだらうと思ひの外、一向それに対しては誰も何とも云はなかつた。かくの如くして永井荷風を中心として起つた問題は、いまだに明確な解決が出来て居らぬ」——周囲があれこれ取り沙汰した荷風の「創作の態度」は、結局実定されず、論争のクリティカル・ポイントが再浮上することなく、事態

は肅々と沈静化した。

おわりに

「内に決定せる態度なくして外に決定せる態度あるが如くに装ふ」²⁴、「自己」の規定を外部にゆだねる²⁵。姿勢という、阿部が「批難」した点について、御風は応答しえなかつた。それゆえ本論争は、「主義」といつた、まさに党派的な争いに終始しているといった感覚を、われわれに与えてしまう。論争を眺める周囲の者も、そのクリティカル・ポイントに到達していかない。そうした側面に照らせば、本論争は、研究史において、軽く流されるべくして流された論争であつた、とも言えるだろう。

遺された課題は多い。例えば、御風という、この時代の文学論を見ていたら必ず目にする批評家は、これまで熱心に論じられてきたとは言えない。これは反自然派の面々に関してもそうである。一般論として、時評の類というのは、然るべき題名が付された評論の類に比べて、後の時代に残りにくい（単行本や、全集の類に収められることが少ない）。今日では散逸してしまい、原誌（紙）を確認できないものも少なくないが、それらを地道に収集し、例えば、御風の〈自然主義論〉²⁶とでもいうべきものを、体系立てて論じる必要があるだろう。言うまでもなく、自然主義文学に関する研究は、蓄

積の層が厚い。が、本論争が軽視されてきたように、忘れられた文脈や、見逃されてきた同時代の論点とでもいべきものは、少なからず遺されていると思われる。それらを（再）発見することを今後の課題としつつ、筆を擱く次第である。

注

- ① 明治四十一年の二月号から始まった顕彰であり、初回は小説・演劇・絵画の部門に分かれていた（第二回以降、評論・詩などの部門が追加）。第一回の小説部門で田山花袋「蒲団」が受賞。第二回は島崎藤村「春」と正宗白鳥「何処へ」であった。
- ② 早稲田文学記者「推讀の辞」（『早稲田文学』第五一号、明治四三・二）、二―三頁
- ③ 石川啄木「時代閉塞の現状（強権、純粹自然主義の最後及び明日の考察）」（明治四三年八月稿、生前未発表）。引用は『啄木全集』第四卷（筑摩書房、一九八〇・三）、二六六頁より。
- ④ 吉田精一「永井荷風」（八雲書店、一九四七・一二）、八七頁
- ⑤ 例えば瀬崎圭三は、この一連の出来事は、「非自然主義者をしてまるで鬼の首でも取つたやうな」（この部分は御風の言からの引用）「イメーヂを与えてしまったことは確かであろう」、「自然主義 VS 反自然主義の二項対立的な図式からでは掘い取れない部分が既に出来てしまっている」、「明治四十年代の荷風が、その出発点ゆえに、自然主義陣営側から一定の評価をされていた人物であったということはこの一連の事象から明らかであろう」、と述べる（『永井荷風「谷崎潤一郎氏の作品」の欲望——谷崎潤一郎処女小説集『刺青』をめぐる——』『名古屋近代文学研究』第一六号、一九九八・一二、五六頁）。論の力点は無論別のと

〈自然主義〉の主体性

ころにあり、それゆえかもしれないが、ごく常識的な整理にとどまっている。また、日比嘉高は、「当初『あめりか物語』を「ビュアな自然派の作」とした相馬御風も、ここに至ってその評価を修正するようになる」と述べた上で、「ただし御風はこの後「推讀の辞」をめぐる論争でも、荷風が根底においては自然主義的な意識を保持していることを読み取ろうとし続けている」と、ごく簡潔に論争に触れている（『自己表象』の文学史——自分を書く小説の登場——翰林書房、二〇〇八・一一、第二版、二一八頁）。同じく論の力点は別のところにあるのだが、しかしそれを割り引いたとしても、論争の中身が軽視されているといった感はない。

- ⑥ 日本文学研究資料刊行会編『日本文学研究資料叢書 永井荷風』（有精堂、一九七一・五）には、付録として「荷風文学同時代評集成（明治編）」なるものが付されている。その中に「推讀の辞」をめぐる論争」という項があり、抄録や書誌情報などの記載を含め、いくつかの同時代評が復刻されている（一九五―二〇六頁）。なお、片上天弦「文壇時感」（『秀才文壇』明治四三・四）について、「*未見」という編者の注が付されており、調査を行ったが、発見には至らなかった。今後の調査を俟ちたい。
- ⑦ 「G生」という、御風であると思われる者による『荷風集』の評価においても、「唯美主義的気分の情緒的表現」「智的表現」といった二方法が用いられる（『新書批評』『早稲田文学』第四九号、明治四二・一二、六七―六八頁）。
- ⑧ 阿部次郎「自ら知らざる自然主義者」（『東京朝日新聞』明治四三・二・六）
- ⑨ 相馬御風「一家言」（『読売新聞』明治四三・二・一三）
- ⑩ 太田水穂「近時の評論」（『読売新聞』明治四三・二・二七）

- ⑪ 「寸鉄」(『新小説』第一五年第三卷、明治四三・三)、二三四頁。この欄は何人かの分担で執筆されているようであり、当該箇所末尾には「自明生」という署名がある。なお、この論説は注⑥前掲書のリストのなかには含まれていない。
- ⑫ 徳田秋江「九雜誌を評す」(『文章世界』第五卷第四号、明治四三・三)、引用は『近松秋江全集』第九卷(八木書店、一九九二・六)、三八一頁より。
- ⑬ 「六号子」(『新文芸』第二号、明治四三・三)、九一頁。この論説は、複数のトピックについてそれぞれ異なる署名で書かれており、当該箇所の末尾には「非自然派」と付されている。この論説も同じく、注⑥前掲書のリストの中には含まれていない。
- ⑭ 安倍生「二月の評論」(『ホト・ギス』第一三卷第六号、明治四三・三)、四〇頁
- ⑮ 本間久雄「二月の評論界」(『早稲田文学』第五二号、明治四三・三)、六八頁
- ⑯ 阿部次郎「再び自ら知らざる自然主義者(上)・(中)・(下)」(『東京朝日新聞』明治四三・三・二〇(一二))
- ⑰ 当時の文学論において頻繁に言挙げされる「形式」という語は、甚だ曖昧な概念である。論争の傍観者は云う。「吾輩は文壇の何々主義と云ふものは総て形式の色別と解して居る。何も内容——作者の頭——にまで及ばすべきものではないと思ふ。斯う考へれば第一義だの第二義だの自己の問題だの観照だの徹底だの態度だのと総て無用の議論だ」。「内容で主義を定めるなんて到底不可能な事だ」(文泉氏「側面観」『国民新聞』明治四三・三・三〇)。「内容」とは「作者の頭」、つまりイデオロギーやパンセといったものを指すようだ。では「形式」とは一体何なのか。この小論では、自然主義は「形式」を「打破」しており、「型のな
- い所に値打があるのだ」と言われる。「型」というのは、ある種の「作風」とでもいうべき漠然とした概念の謂いであろう。当時の(主に自然主義に関する)文学論を再考するにおいて、「内容」と「形式」の意味論とでもいうべき問題は、改めて考える必要があるだろう。
- ⑱ 相馬御風「一言言(一)・(二)・(三)」(『読売新聞』明治四三・四・六、七、九)
- ⑲ 鵬心「赤門から」(『帝國文学』第一六卷第五号、明治四三・五)、六〇〇・六〇一頁
- ⑳ 本間久雄「四月の評論界」(『早稲田文学』第五四号、明治四三・五)、七〇頁。なおここでは、注⑥で触れた、未見である天弦の論説が取り上げられている。曰く、天弦は「相馬氏と同様の意見を述べて、今の文壇の一派がすべてのものを「一定の型に嵌めやうとする傾き」のあることを難じ」、「自然主義を唱へる人が荷風氏を推賞するのは矛盾でも何でもない」と云うてある。本間の引用が正確かどうかは不明であるが、いずれにせよ言えるのは、御風・本間・天弦と、三者が同じ側に立っているということである。
- ㉑ ABC「現文壇の平面図」(『文章世界』第六卷第一号、明治四四・一)、一四二頁
- ㉒ 「主義を危険呼ば、りをした新聞」というのは、無署名「危険なる洋書(十三)」(『東京朝日新聞』明治四三・一〇・一)を指すと思われる。「▽忠孝を冷笑する永井荷風」という見出しで糾弾されている。森鷗外「沈黙の塔」(『三田文学』第一卷第七号、明治四三・一一)がこの論説を取り上げて批判したことは、よく知られている。
- ㉓ 永井荷風「紅茶の後(其五)」(『三田文学』第一卷第六号、明治四三・一〇)内の一節、「冷笑」につきて。引用は『荷風全集』第七卷(岩波書店、一九九二・一〇)、三三〇頁より。なお先行諸論において既

に指摘されているが、この自作解説は、片上天弦「快樂主義の文学」
〔『早稲田文学』第五七号、明治四三・八〕への応答でもあった。両者の
応酬は、論争のいわば余波であつたといえるだろう。

※資料の引用においては、漢字は適宜現行の字体に改めた。ルビ・傍点類
はいずれも原文のものであるが、一部省略したものもある。(一)(補足
説明)はすべて引用者が施したものである。年代の表記は同時代のもの
は和暦で、それ以外のは西暦で表記した。